歯学研究へのいざない

～若手歯学研究者へのエール～

明海大学　学長
安　井　利　一

【略歴】

1951年　北海道函館市生まれ
1977年　城西歯科大学卒業
1981年　城西歯科大学大学院博士課程修了
　　城西歯科大学助手（口腔衛生学）
1997年　明海大学教授（口腔保健・予防歯科学）
2002年　明海大学歯学部付属明海大学病院
2003年　明海大学歯学部長
2006年　日本スポーツ歯科医学会理事長
　　明海大学副学長
2008年　明海大学学長（現在に至る）

1　はじめに

私は 1977 年に城西歯科大学を卒業しました。当時は、歯科医師が不足している一方で、ご存じのような「むし歯の洪水」の時代でしたから、同級生はためらいもなく臨床医として巣立っていきました。私は、両親ともに歯科医学とは無関係の人間でしたので、すぐに臨床医の道を進むのではなく、研究しながら歯科医学の進むべき方向性を見てみたいと思っておりました。

研究するにあたっては、自分の性格からして、研究期間を定めて集中的に研究するのが宜しかろうということで、大学院に進むことにしました。最初に研究として興味があったのは、臨床では小児歯科、基礎では病理、そして社会歯科での口腔衛生でした。「むし歯の洪水」のなかで、学生時代の臨床実習で、小児歯科を回っていたときに、お母さんが泣き叫ぶ子供に「頑張ってね。頑張って治療したら好きなものを買ってあげるから」と言うのを聞いて、「歯は治療するために存在しているのだろうか」と考えたのが始まりでした。だから、臨床だったら小児歯科をと思ったのですが、話を聞いてみると日常の臨床にかなりの時間を費やされていたことと、研究のテーマが永久歯の萌出に関することでしたので、少し研究の方向が違うなと思ってやめました。

次に、むし歯の洪水の最中、病理学的に対応方法はないのかと考えて病理学を考えたのですが、病理学は病気になった後での対応が主でした。そこで、最後に口腔衛生学の門をたたきました。教授の中尾俊一先生は大阪歯科大学の口腔細菌学から口腔衛生学に所属変更してきた先生でしたが、細菌を見る目と同時に、人を見る目を持たれた先生でした。「むし歯は水道の栓を閉めるのが最初だ。予防せずに治療するのは流れる水を止めずにザルで水をすくうに等しい」と目を爛々として話しておられたのが印象的でした。

当時の口腔衛生学は、まだまだ学問としては緒についたところで、東京医科歯科大学の大西教授も細菌学からの先生でしたし、他の大学の先生方も、いわゆる衛生学の教室から移られた先生が多かったように思います。東京歯科大学は衛生学と口腔衛生学の二つの講座があってしっかりしていたと思います。教科書は東京歯科大学から神奈川歯科大学の教授になられた飯塚喜一教授の「口腔衛生学」が主たる書物で、他の先生方はご自分で資料を作られていたように思います。さて、そのような状況でしたが、「むし歯の洪水」を防ぎ、「おやつを買ってあげるから」の治療から脱却するには、やはり「歯は何のためにあるのか」を追求することが必須ではないのかと考え、最終的に大学院口腔衛生学専攻となったわけです。

2　口腔衛生の研究に取り組んで

研究はミュータンス連鎖球菌が一世を風靡していた時代で、多くの研究者がミュータンス連鎖球菌と糖に関する研究をしていました。私は、大学を卒業してすぐに大学院に進みましたので、今、研究の世界はどうなっているのかを知ることが大切だと思い、毎日毎日、教室の仕事をしながら外国の論文を読みあさりました。論文を読んでは、その論文の文献にあがっている過去の関連論文を後戻りする方法です。これは勉強になったと思います。そうして、一つの研究の源を知ることによって、これからどのような方向に進んでいくのかの予測が立ったといえます。

あわせて、う蝕に関する日本の研究者の著書や論文あるいは創設などを読みあさりました。その中で、今後の研究の方向性に強い影響を受けたのが、当時の国立予防衛生研究所歯科衛生部長をされていた荒谷真平先生の「虫歯のシンポジウム」でした。荒谷先生は、生化学の先生でしたが、この「虫歯」という病気を高所大所から見ておられました。そこからヒントも得て、私は「歯の萌出時期と齲蝕の発生との関係」をテーマに研究することにしました。

歯は萌出してから石灰化が進んでいきますが、その萌出直後に、う蝕環境にさらされ、ミュータンス連鎖球菌と糖との戦いに入っていきます。ラットの歯の萌出とミュータンス連鎖球菌と糖を掛け合わせた実験系を立ち上げて大学院の2年生から3年生にかけて積極的な実験を毎日、朝から夜までやっておりました。体力と気力が必要です。そして、4年生で「BASIC STUDY ON EXPERIMENTAL RAT CARIES-Serial Observations of Caries Incidence and Bacterial Variation on Rat Molars in Short-term Experimental Caries-」を仕上げて1981年に博士課程を修了しました。

3　基礎研究から発展させたこと

大学院を修了しても相変わらず頭の中にあるのは「人間生活における歯の意義」でした。「歯は治療のためにあるのではなく、人間生活に歯はどのような役割を果たしているかを国民に理解してもらうことが大切だ」という気持ちは、自然と幼児、児童、生徒のいる学校（幼稚園～高等学校）でのフィールド研究へと発展していきました。

学校歯科保健は自分の好きなフィールドではありますが、研究対象としては学習指導要領があって方向性がある程度決められているので難しいものがあります。一度、大学院を終えたころ、フィールドの小学校で歯科健康診断結果と当時の運動能力テストの結果を眺めていた折に、とても歯の状態が悪い児童に運動能力テストの成績が悪いことに気が付きました。これなら「人間生活に関連して歯の役割」が語れるのではないだろうかということでスポーツ歯科医学の研究に入ることになりました。

自分の研究人生を振り返ってみると、研究には体力と気力が必要です。徹夜ができる頃が一番充実していたように思います。研究は長くできるものですが、方向性はある程度の範囲の中で関連性をもって行うものだと思っています。今現在は、学校保健とスポーツ医学の研究を中心にしていますが、それも 1970 年代に出会ったフィールドでの興味関心が続いてきたものです。このように振り返ってみることができるのは、相当後からですので、今は自分の信念で研究を遂行することを考えていくことでよろしいのではないでしょうか。